

## 仕事も趣味も充実した暮らしを続けたい長州源一郎さん(40代後半・男性)の支援

## 【事例概要と今回討議する場面設定】

## ー以前(2年前まで)ー

5年ほど前より、A相談支援センターでは、主に就労(再就職)にむけての関わりがあった。

その中で、2年前に就職。安定して働き続けられるようになった。その頃、本人より「一度卒業したい。」との希望が表明されたことや、家族からは「あまり家の中に立ち回ってほしくない」様子が強く窺えたことから、担当者は就労以外の面が気になりつつも「何かあったらまた遠慮なく相談に来て」と一旦支援を終結していた。

## ー再開(2ヶ月前)ー

2ヶ月前、本人が父母に連れられる格好で来所。

父母は困った様子で「もう息子と一緒に暮らせない。自分たちは半年後を目途に田舎に帰る。息子(源一郎)は施設に入りたい。」「最近、お金の無心がひどい。拒否すると、執拗に要求したり、物に当たったりするようになってきた。自分たちに手を挙げることはないが、体が大きいので怖い。」と訴える。

本人は言葉を発せず、うつむいたままである。

以前の担当者は退職しており、今回話を聴いた相談員は、まだ状況も経緯も詳細をつかめていない。

相談員は、「また一緒に考えていきましょう。何度かお会いして話をお聞きしたい。」と提案し、同意を得た。

## ー再開後ー

相談員は、週に1～2回程度、仕事帰りにセンターに寄ってもらったり、自宅の最寄り駅近くのファーストフード店で待ち合わせたりしながら本人との話を重ねた。また両親や姉にも、自宅を訪問するなどしながら話を聞いていった。

## ー再開から2ヶ月後(今回の演習の現時点)ー

情報も少しずつ集まり、本人や家族の意向もわかってきた。

本人は、「お金使うなと言われる。けど、そんなに使ってるのかな。」「足りなくなったらもらってるだけなんです。今まで通り。」「Suicaだと大丈夫です。けど、使えないところもあるんです。おもちゃ屋とか定食屋とか。」「なんでくれる時とくれない時があるのかな。変だよ。僕のお金なのに。」「お父さんお母さん沖縄に帰りたいみたい。ほんとと一緒に暮らしたいけど……。ついてはいけない。50歳までに独立しなくちゃと思ってた。」「でもまだよくわかんないです。ひとり暮らし大変ですよ。自信ないな……。」

父母の発言の真意は、「沖縄に年の離れた兄弟が暮らしているが、だいぶ弱ってきた。『助けてほしい』と言われ、なんとかしてやりたいと思っている。自分たちも定年後は生まれ育った故郷に帰りたい気持ちがずっとあった。帰ればなんとかなる土地だ。決意は固い。娘(源一郎の姉)も理解してくれている。しかし、源一郎が心配。甘やかしてきたので家のことは何もできない。かといって、家にあの子を連れて帰るわけにもいかない。故郷の村の近くの施設に入れるのが一番とも思う。だが、本人は今の仕事を頑張っているし、この町で育ってきたから、田舎に行く想像はできないと思う。本人もそんなことを言っている。でも、ひとり暮らしはあの子には無理だと思うし、そうになったら自分たちは安心して死ねない。福祉のことは避けてきたので全くわからないけれど、このあたりの施設で安心して暮らせて、今までに近いような暮らしができることはないんですかね。」とのこと。

源一郎さんの姉は、「自分は家庭があって、子どもが3人いてまだ手もお金もかかる。他県に住んでいるが家もローンがまだまだある。できることは協力してやりたいが、むずかしいことも多いと思う。」という。

関わりの中で本人や家族の頭の中は(少し)整理され、ゴール設定もできてきた。

そのため意向や情報を整理し、どのような提案をするか考える時期と担当相談支援専門員は判断した。

そこで、所内の検討会議に提出し、アセスメントと今後の方向性の検討を自分だけではなく、相談支援専門員全員で行おうと考えた。

## 事 例 の 概 要

事例タイトル	仕事も趣味も充実した暮らしを続けたい40代後半の男性の支援
年齢・性別・家族構成・ 現在の地域の居住歴	長州源一郎 さん    年齢（ 47 ） 歳・性別（ 男 ） ・ 女 ） 家族構成（ 父77歳／母74歳：同居 ／ 姉は結婚し、他県在住：別居 ） 現在の地域の居住歴    47年
手帳の種類と等級	療育手帳B(中度)
障害支援区分	未調査
生活歴及び病歴	<p><b>【生活歴】</b>  ○○市で出生。幼稚園から小学校では当初通常学級に在籍するが、4年次に勉強についてゆけなくなり、特殊学級に移る。中学校は、特殊学級に在籍し、楽しい学校生活を送った。いじめも多少は受けたが、ひどくはなかった。</p> <p>中学卒業後すぐ食品機械の部品製作メーカーに就職。工場での金型プレスやバリ取り、製品の箱詰めの仕事に従事していた。30年ほど勤務していたが、工場が海外移転することになり、人員整理で解雇となる。その後、失業給付を受けながらハローワークに通い、再就職を目指していたがうまくいかないことが続いた。</p> <p>失業保険の終期も見えてきた頃、たまたま街で出会った中学時代の同級生が就業・生活支援センターの支援を受けていることを知り、自分も相談できないかと相談したことから福祉の支援とつながる。連戦連敗の就職活動に落ち込んでいたり、新しい職種への挑戦に恐怖感があったことから、就労移行支援を使うこととなった。また、この時期に成人判定を行わなかった療育手帳の再取得や障害年金の申請などを行う中で、相談支援事業所の支援も開始される。</p> <p>自信を取り戻した後は、現在の物流倉庫でのピッキングの仕事に就いて現在に至っている。就労も安定していることから、本人の希望もあり一旦終結していた。</p> <p><b>【病歴】</b>  乳幼児期に数度てんかん発作があった。大人になってからはなし。</p>
相談に至る経緯	前頁参照
望んでいる暮らし、訴え、困っていること	(本人) 「仕事を続けたいです。」「プラレールや電車が好きです。」 「(将来と言われても)よくわかりません。50歳までに独立したいです。」 「(今の生活は)このままでいいです。」 (父母) 「私たちがいなくても、暮らせるようになってほしい。施設に入りたい。」 「(本人が大柄なため)最近執拗にお金を要求されることが頻回で怖い。」
本人や家族の問題	・ 本人はずっとお金の管理を父母にまかせ、必要な時必要な額をもらうやりかたをとってきた。ここ1年ほどプラレールなどにはまって、使う額が増えており、そのやりとりがうまくできていない。 ・ 父母の高齢化により、本人の今後の生活を考える転機を迎えている。
本人の能力や 環境的問題	・ ずっと親子での暮らしを続けてきたため、今後の親亡き後の生活のイメージがついていない。その必要性についても腑に落ちていない。 ・ 枠組みなくお金を使ってきたため、金銭管理能力ではなく、そもそもの金銭感覚に乏しい。
本人の趣味趣向、 楽しみ、長所	家庭内でも社会でも、慣れればできることが多い。就労等の大変と思われることも継続できる力がある。自分の思いが通らないと不機嫌になることもあるが、基本的にはおだやかで優しい性格（特に第三者に対しては）。
その他気が付いたこと	慣れた人や場所は全く問題ないが、未知のことについてはしり込みしがち。 好きなことや趣味は10代や20代から一貫している。同じことをルーティーンで続けることで飽きたりしない。 お金の使う額が増えたのは、新しい職場での趣味仲間の影響の様子。